掲載許可番号
d20211118-04

盲導 介助 聴導

伝える補助犬の使命

補助犬（盲導・介助・聴導犬）を通して皆に優しい社会を考えようと、松山市桑原3丁目の松山東雲短大で11日、訓練士による講義があった。

松山東雲短大 訓練士 役割解説し実演

受講したのは、現代ビジネス学科の1年生約20人。同科の卒業生は医療・福祉分野でも活躍しており、将来、障害者や高齢者らと接する機会も考えられることから企画した。

講師は同市の一般社団法人ドッグフォーライフジャパン代表で訓練士の砂田真希さん(45)。同法人からは、これまでに聴導犬3匹と介助犬1匹が誕生している。

まず「手足の不自由な人をサポートするのが介助犬」などと、3種の補助犬の役割について説明。同法人で育成中の介助犬候補ハンナ（雌、3歳）や聴導犬候補エマ（同）も登場し、落とした物を拾う、チャイムを教えるなどの動作を実演した。

「補助犬は人間のヘルパーほど多くのことはできないが、24時間そばにいて、用を頼めばいつでも喜んで応えてくれる。食事や排せつの世話は大変だが、これが障害のある人の自立につながる面もある」と砂田さん。

車いすの女性が電車に乗ろうとしたところ「事前連絡が必要」と言われた他県の例を挙げ「皆が当たり前に受けているサービスを、障害者だからと受けられないのは不平等。その人に必要な配慮を社会がすれば、その人は障害者でなくなる」と強調した。

最後に「皆さんは今後、困っている人を見たら声を掛け、日常の中で障害者の立場を想像してください」と呼び掛けた。

（藤本理恵）

落とした物をハンナが拾うデモンストレーション。砂田さん（左）と一緒に生徒も挑戦した